

反省的意識の働きに先行するもの — 日常生活の生活過程における行動の特徴 — (その2)

杵 淵 俊 夫*

(平成5年4月30日受理)

要 旨

本稿は、反省的意識の働きに先行して既に展開されている活動、日常生活の諸過程を構成する通常の行動における、固有のまとまりの機制を、経験的事実に基づいて記述しようとするものであって、その一部分である。ここでは特に、この種の活動が帯びている、三つの主要な一般的な諸特性を指摘して具体的に説明する。活動の諸過程のまとまりを成り立たせている、習慣的な行動諸動向、多様な関心や動機を未分化なままにゆるやかに統合しつつ、活動を方向づけている主題的な意図の包括的で流動的な働き、その意図や関心と活動諸過程が帯びている、一般的・匿名的な性格が指摘される。それによって、前反省的な、この種の活動のまとまりの固有のあり方、機制を一層具体化して記述することが、本稿——(その2)——のねらいである。

KEY WORDS

前反省的活動 pre-reflective action

習慣的行動 habitual behavior

感覚・感じ sense or feeling

第三次的性質 tertiary quality

匿名的な行動 anonymous behavior

共同生活 community life

(その1)

はじめに：問題関心と課題の設定

—— 反省的意識の働きの生み出し、統合し、意味づけるもの ——

1.) 反省的意識の働きに先行するもの

—— 日常生活過程における活動の前反省的・前意識的性格 ——

2.) 前反省的な活動の諸過程に「まとまり」を与えるもの

(その2)

3.) まとまりのある前反省的活動が帯びている一般的な諸特性

(以下、その3)

4.) 反省的意識の働き

—— 前反省的諸過程の再構成 ——

* 教育基礎講座

おわりに：「感性」的と呼ばれているものと「個性」的と呼ばれているもの

3.) まとまりのある前反省的活動が帯びている、一般的な諸特性

3-1.) 前反省的活動を一般的に展望すること

——活動のまとまりの機制に注目して——

前反省的、前意識的な諸活動や精神的諸過程がそれぞれ、一定のまとまりと方向性とを含んで成り立っているということは、前項——2.) 前反省的な活動の諸過程に「まとまり」を与えるもの——において示された。そこで、今度は、それぞれ固有のまとまりと方向性とを有して、多種多様なあり方をとる、前反省的な諸活動が、それらに共通の基本的な枠組を成すものとして帯びているところの一般的な諸傾向、諸特性を指摘してみたい。それは結局、この種の諸活動の一般的な機制、特にそれらにおいて成り立っているまとまりの機制を、さらに具体化して考察することになる。例えば、前反省的、前意識的な活動や精神的諸過程においては、さらに具体的に見て、どのような種類や性格の機制を以て、そのまとまりは成り立っているのか、その種のまとまりは、その意図や動機において、一般的にどのような特徴的な傾向を帯びて働いているか、その種のまとまりから成る前意識的な活動諸過程の動機や機能（結果）についての人々の相互理解と、それに基づく行動の共同とを成り立たせているもの、かくしてこの種のまとまりの前提条件となって、それを安定させるように働くものは、一体何か等々が、ここで問われるべき主要な論点である。

さて、前反省的、前意識的な活動や精神的諸過程を、そこにおけるまとまりの具体的な機制とその機能の仕方に主として注目しながら、(既に前項——本『紀要』、第12巻第2号、p. 90.——において述べたように) 方法論的に体系的に可能な限り広く展望してみると、われわれはその多様な諸活動・諸過程に共通して見出される基本的な枠組として、次のような三つの一般的な傾向または特性を指摘することができる。即ち、それは、第一に、それらは習慣的な、または習慣化された活動であるということ、第二に、そこでは意図の未分化で包括的な統合の状態が見出され、状況との直接的で多面的な相互作用として活動が展開されているということ、および第三に、活動諸過程が一般的・匿名的な性格のものとして営まれていること、の三つである。これらの三つの傾向はいずれも——活動の意図、より正確に言えば活動の意図された諸結果とその諸機能とが、多少とも体系的に行われる反省的思考や判断の主題的な対象として意識化されて取り扱われるのでない場合に——その種の活動諸過程が自ずと帯びるに至る、最も一般的な諸特性である。これら三つの一般的な傾向は、また、前反省的な活動諸過程におけるまとまりのメカニズムや、その現れ方・機能の仕方について、さらに具体的に考察する手がかりを与えてくれるものでもある。

3-2.) 習慣的行動であるということ

前反省的・前意識的な活動は、第一に、習慣的な、または習慣化された活動である。前反省的な活動は、体系的な反省的思考が未だ十分に発達せず、明確に規定された一面的な意図（目的意識）によって方向づけられたり組織立てられたりしていないので、前後の行動の脈絡にお

いてその活動が有するものとしての全体的な意味も、そのひと続きの活動の諸過程や諸段階を構成している部分的な動作の意味も、その内容を明白に確定されて意識されることのないままに、為され且つ経験される。この種の活動諸過程は、換言すれば、分析的な反省的思考の結果として設定された、限定された目的意識によって首尾一貫して統御されたり吟味されたりする必要もなければ、またその余地もないほどに、その当事者、活動主体にとって深く親しみ馴染んで、強固で安定した常軌となった、周知・自明の一連の過程ないし様式の、「自動化された」または「自動的な」(automatized or automatic)、「不随意に遂行された」(E. L. デシ、石田梅男訳『自己決定の心理学』、誠信書房、1985、p. 80-83.) 発動である。それは習慣化された活動である。

ところで、習慣、つまり習慣的な、または習慣化された行(活)動について言及する場合、二つの系列の常識的な偏見が意識化されて取り除かれなければならない。その一つは、習慣の働きを、専ら生活体の心身の過程の内部でそれだけで孤立したものとして生起し完結する、いわば自閉的な性格のものと同視するものであり、もう一つは、習慣を、行動主体の意志の働きそのものにはまったく関わりのないものとして、箱の中の通常の道具等と同じように、意識的決意によって取り上げられ使用されるのを待っている、単なる手段や技術的能力として看做すものである。われわれの日常普段の生活の諸過程における習慣、習慣的な行動を改めて注意深く検討していくと、まさにこのような習慣の見方が経験の事実と背反しているものであることが明かになる。さて、習慣とは、現実には、行動の習慣であり、さらに具体的には習慣的な・習慣化された行動以外の何ものでもないが、一方、行動とは——勿論、習慣的な行動も——、その当事者、生活体とその環境との相互作用である。習慣的行動は、環境の諸条件に働きかけて、それを取り扱い行使し、それを生活体の心身の諸条件や諸過程と統合するような、行動の自動化された様式である。例えば、階段を登る、車のギアを切り換える、バスケットボールにおける諸動作——ドリブルやシュート——、ピアノ演奏の諸技法、話す——等々。これらは、既に十分に習熟されていて、不随意にまたは自然に為される過程であるが、そこには行動環境の諸条件を巧妙に統合しつつ行使する、心身諸過程の働きが見出される。階段を登る行動の過程には、段差に応じて調整された、脚に焦点化された全心身の一連の働きがあるし、話す過程には、音声器官の熟練とともに、空気と言葉と周囲の人々等への適正な取扱いや働きかけが含まれている。また、文明と未開との生活様式に関する具体的な比較は、われわれ、文明に属する者の日常的活動やその習慣が、「予め準備された環境を必要とする」ということを明らかにしてくれる。巨大な施設・設備や合理的に組織された、複雑な制度や法的規制というようなものが予め生活環境として整備・確立されているのでなければ、われわれ、文明社会の日常的な——習慣的な——行動や生活の諸過程は、明らかに成り立たない。この種の文明の歴史的・社会的な遺産は、日常的——習慣的——生活行動が環境諸条件に依存するとともに、それに働きかけて、それを作り変えていくものであるということを証言する。さらに別の例をとれば、犯罪者の処遇を考慮し決定する際に最も微妙で且つ重要な意味をもつと思われることは、まさにその処遇が彼の特定の日常生活上の行動、行動習慣——特定の性向や態度(disposition or attitude)、さらには性格——にとって如何なる具体的な条件として働くことになるか、彼の現在の(犯行と結びついた)行動習慣や性向・態度の形成に際して、当該社会の生活環境が如何なる条件を成して影響を与えてきたか——ということに関する判断である。刑罰は——単純な応報としてではなくて——それ自体犯罪者の教育としての意味を含んでいるというわけで

ある(「教育刑論」)。こういうわけで、習慣、習慣化された行動を心身の内部だけの私的なメカニズムとして、現実の環境の諸条件や前後の具体的な行動の文脈から孤立したものとして、それ故にまた行動主体の意識的決意によって直接且つ一方的に操作され、「再プログラム化」され得るような過程として考えるわけにはいかない、ということがわかる。歪んだ直立姿勢しかとれない——習慣を身につけてしまっている——人に、まっすぐに立てと指示を与えたら、そして本人もその気になるならば、それで直ちに彼は正しい直立の姿勢をとることができるであろうか。これまで、まさにその歪んだ姿勢こそが正しい直立姿勢だと感じ且つ信じて疑わなかった彼は、まっすぐに立つということが具体的にどのような感じの身体のあり方であるのか、容易には了解し得ないであろう。また、たとえ、偶然運よく、指示されたその具体的な正しい直立姿勢の観念を彼が把握したとしても、彼はそのイメージに一致した動作を為そうとして、既にそこにある——即ち、彼の身体に実現して働いている——例の歪んだ習慣的メカニズムを以て動作する以外に、他の手立てをもっていない。彼は以前とは違った姿勢をとるであろうが、それはただ悪く違っているだけの、別の直立姿勢であることだろう。犯罪者の改善が単なる応報の刑罰とお説教だけでは実現しないことは、既に示唆したし、また周知の事実である。そうではなくて、習慣(化された行動)の再プログラム化は、その種の行動の過程ないし様式に統合されて含まれている、環境の諸条件の要素とは異なった、新たな諸条件からなる環境が提供され、かくしてその行動がこれまで位置づけられてきた、現実的な意味の文脈が具体的に変更されるような場合にだけ、初めて可能なものとなる。事実上——つまり周囲の人々から見ても——まっすぐの、しかし彼にとっては通常の直立姿勢とは異なった、或る姿勢を見つけだしてその姿勢を実際にとること、そして、その姿勢をとる場合に彼に確実な手がかりとなるような環境上の諸条件を指摘してやることこそが肝心なことなのであって、直立姿勢の観念を彼に意識させることは、この場合不要であるどころか、致命的でさえある。禁酒を決意して、そればかり考え続けている大酒飲みは、まるで飲酒につながる行動を始めるために可能な限りの努力をしているようなものである。ここでは、彼にとって飲酒と等価な意味をもつような、別の行動系列を発見し、その種の行動系列を支えるような諸条件を含んだ、新たな環境に彼を導き入れることこそが、肝要な点なのである(「カタルシス」や「情報の再解釈」)。

ところで、習慣をめぐるもう一つの偏見は、習慣(化された行動)を、行動主体の意志の働きの単なる対象ないし客体、意識的決意によって採用されるのを待っている、単なる手段ないし技術的能力、いわばまったく受け身の道具に過ぎないものと看做すものである。習慣についてのこのような見かたは、勿論、上に批判的に指摘したような、習慣的機能を生活体の内部的過程としてとどまるものと見る考えと結びついているだけでなく、また、習慣(化された行動)は相互の間で働きかけ合うことなく、それぞればらばらに孤立して働くものであるとする考えをも併せて含んでいる。この種の偏見は、しかし、比較的単純な動作の習慣——歩く、腰かける、走る、またはナイフ、スプーン、鉛筆、かなづち等の極く簡単な道具の使用、話す、書く等の習慣——のメカニズムをさらに過度に単純化し一般化して形成された観念に基づいている。しかし、われわれの日常普段の行動の諸過程を注意深く観察し直して見ると、それは経験的事実と背反していることがわかる。まず第一に、具体的な個々の習慣(化された行動や動作)を取り上げ、それを作動させる——というより、それらの特殊な習慣的メカニズムを直接体現しつつ活動する——のは、行動主体のその都度の直接的な意志、意識的決意というようなものでは決してなくて、彼の心身、身体=精神そのものである。意志や決意は、およそ、一連の行

動の全体としての目標や目的、意図された（最終的な）結果に主として関わるものであって、目標（的）を達成する諸過程——を構成する部分的な行動や動作——の具体的で特殊な働きや操作には、通常、直接には関わらない。或る目標が意図されるや否や、それが彼にとってまったく新奇なものでない限り、それを達成すべく、彼の心身が一連の諸行動・動作に自ずから乗り出す。着手されて、順次遂行されて行く（自らの心身の）一連の働き、行動・動作は、具体的または主題的には意識されていないのが普通且つ自然であって、むしろその具体的な手順や細部の調整が意識される場合には、それは、ちょうど自分の足の細部の操作をなまじ意識したために沢山の足をもつれさせて転んでしまったムカデのように、意識過剰の、ごちない「不器用な事態」となってしまう。そして、現実の行動や動作は、それが自然なもの、「器用」で滑らかなものであるためには、心身が習慣的に作動するのだからなければならない。或ることについて話す時、誰もが文法によって拘束されているとは感じていないように、「特にルールの存在を意識しないでも、行動することがそのままルールを守ることになる」のが、普通の生活の場面である。（長谷正人、『悪循環の社会学——「行為の意図せざる結果」をめぐって』、ハーベスト社、1991、pp. 117-121.）かくして、或る意図の下に外的事物を取り扱うとき、私はその事物に注目し配慮するが、それを扱う私の心身の、一連の調整された働きそれ自体は——その意図の自明で暗黙の前提として——配慮の外にあって、既に自ずと働いている。私の決意と私の「身体」とのまさにこのような関係をメルロー＝ポンティは「魔術的な関係」と呼んで、具体的な運動能力としての「身体」の、（或る決意に、直接且つ自ずから呼応する）「運動投企」ないし「運動指向性」*Bewegungsentwurf: projet moteur, intentionalité motorice* に注目している。（*PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION*, p. 110, 120, 128, 邦訳、上 p. 167, 181, 191.）さて、第二に、われわれは前段で、歪んだ直立姿勢しかとれない人が、意識的に決意しさえすれば正しく直立することができるかという問題を検討することによって、その種の決意が直ちに歪んだ習慣的姿勢を適切に是正するようには働かないこと、むしろその決意は歪んだ古い習慣的姿勢の働きの影響を受けて、その内容を歪められてしまうこと——即ち、まっすぐに立てという指示は、以前の歪んだ姿勢とは異なってはいるものの、ただ別のもう一つの歪んだ姿勢をとらせることになるだけであるということ——を確認した。そこには、意志や意識の働きと習慣化された心身の働きとの間の、相互作用の関係を見てとることができる。さらに言えば、意志や意識の働きは、それが現実的で冷静なものである限り、習慣化された心身の働きを考慮に入れて行われざるを得ないし、また通常はそれが現実の事態であるということもできる。心身の習慣は、人の欲望や意欲のうちにも入り込んで、それを現にあるようなものたらしめるわけである。既に（前項、本『紀要』、第12巻第12号、p. 92. で）述べたように、母語も、生活行動上の基本的な作法や様式も、生活態度としての基本的な好み *taste* も、価値判断の基準も、人生の初期に形成・習得される、最も根本的な習慣的な行動様式であるが、われわれが意志したり望んだりするのは、まさにそれらのもに衝き動かされたり、それらに支えられたりしながらである。アフリカの夜の砂漠の上空でガソリンの尽きてきた愛機を駆って、暗闇の大地に空港の灯を必死に捜しまわっているとき、サンテクジュベリの目に浮かんだものは——「子供っぽい」と思われるだろうか——「焼きたてのクロワッサンとコーヒー」（堀口大学訳『人間の土地』、新潮文庫、1958、p. 24）であったし、孤島に漂着したロビンソン・クルーソウの生活の社会的モデルは、イギリス社会における彼自身の出身階層である、中産的生産者層——「孤立的経済人」——のそれであって、その生活の特徴づけたのは合理的・経営的な「エー

トス」Ethos, いわば, 萌芽の形態における「資本主義の精神」der Geist des Kapitalismusであった(M. ウェーバー, 梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 岩波文庫, 下, 1962, p. 236. 大塚久雄, 『宗教改革と近代社会』, みすず書房, 1964, p. 29. 同, 『社会科学における人間』, 岩波新書, 1977, pp. 41-59.)先入見からまったく自由であるような思考や行動は, 単なる夢に過ぎない。われわれは, さらに(第三に), 習慣的な行動傾向が意志や自我の働き——公式的決心や意識的決定——を強力且つ露骨な仕方では踏みじり, 逆向きに限定してしまうような場合を, むしろ多様に指摘することができる。怠惰な無為徒食の性向, 賭博癖, 酒や麻薬への耽溺等の悪癖がその最も明白な事例であって, それらはわれわれに自らの意識的決意を踏みじらせてしまう。この場合, 既に示唆したように, 意識的決意がただそれだけで悪癖の作用に対抗するのは不可能であって, それに有効に対処するためには, 習慣(的諸傾向)の相互作用の体系のうちで, 問題の悪癖とちょうど対抗的ないし競合的な関係にあるような, 一群の習慣(的傾向)の働きに支えられたものでなければならなかった。さて, 以上のような日常生活に一般的な経験的事実を踏まえるならば, われわれは習慣, 習慣化された行動の特性について, 行動主体の意識の働きとの関係において, こう述べることができる, すなわち, 習慣(化された行動)は, 一面において意識的決意によって行使される手段や技術的能力であるとともに, また他面では, 推進力を帯びていて, 自我や意志が一定種類の活動をするように要求して, その働きを規定し支配するものである, と。習慣(化された行動)は, われわれの有効な欲望を形成すべく働くとともに, またそれを満足すべき実際の行動の実行能力ともなるものなのである。心身の習慣的な行動傾向は, われわれが——まさにその心身を以て, またはその心身において——為すところの意識的決意に入り込み, そこで働き, それを構成する。われわれは, 自らの内奥に至るまで習慣的に構成されている。習慣(的傾向), というよりむしろ習慣化され, 習慣的な諸傾向を体現するに至ったわれわれの心身は, われわれの能力の範囲内にある最も身近な手段, 諸々の道具や手段を統合して働かせる, 手段の中の手段, 一切の手段の手前にある「第一次的な手段」the primary meansであるのである。(HUMAN NATURE AND CONDUCT, 1922, in The Middle Works of J. Dewey, Vol. 14, Southern Illinois U. P., p. 29., 邦訳, 1960, p. 32.)

また, 最後に, 習慣(化された行動傾向)を, 相互に孤立してそれぞればらばらに働くメカニズムとして据える, 伝統的な見かたが, 通常的生活過程における経験的事実と背反していることが指摘され, その結果として, 一個同一の心身の活動における一切の習慣(化された行動傾向)の統合されたあり方, 習慣的諸機能の相互作用の体系が, 考察されなければならない。前反省的, 前意識的なわれわれの行動が何らまとまりも方向性ももたないものでは決してないということについては, 既に前項で指摘した。そして, その種の, 日常普段のわれわれの行動は——反省的意識の働きに先行するものとして——習慣的働きに基づいて為されるものであると考えられるが, もしそうだとすれば, 習慣的に為される行動は必ずからまとまりと方向性を帯びていることになるし, したがってまた習慣的働きは相互に孤立した, 断片的な性格のものではなくて, 相互に働きかけあって一定の脈絡や体系を形成し合うものである, ということになる。断片的な習慣的傾向に基づく, ばらばらな反応行動——というのは, 通常の経験的事実と背反する。重なり合い, 連続し合った環境(諸条件)と私という一個同一の心身全体——心身の, 局限された一器官, 一機能, 一部分ではなくて——との相互作用の結果として形成され再形成されていく習慣(化された行動傾向)が, 相互に働きかけ合い, 浸透し合うのは極く

当然である。習慣的傾向は心身の個々の器官や機能において、それだけで完結したものとして相互に無関係に形成されるわけではないし、また一度心身の行動傾向となるに至った或る習慣は、その後の行動と習慣形成の過程において、修正や補完の働きかけを何ら受けることなくその局外に留まりつづけることができるわけでも勿論ない。およそ、習慣の働きが、というよりむしろ行動が、それぞれ特定の器官や機能に局限されて、相互に分断されているのではなくて、全体としての心身——「身体」(corp, M. Merleau-Ponty)——の働きとしてのみ現れ、個々の器官・機能における諸過程は相互に浸透し合って一定の脈絡を成しているということを適切に例示してくれるものに、「共感覚の現象」le phénomène des synesthésies (M. Merleau-Ponty, PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION, Gallimard, 1945, p. 264, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳『知覚の現象学』, 下, みすず書房, p. 39.)がある。その場合、「形は対象の固有の本性と或る関係をもち、視覚にだけでなくわれわれのすべての感官に語りかける」——われわれはガラスの硬さともろさを見るし、亜麻や綿の織物のひだの形に繊維のしなやかさや乾燥のぐあいを見てとるが、またわれわれにははがねの弾性や灼熱したはがねの可延性、鉋くずの柔らかさが見える。同様に、私の耳には、車の騒音のなかで舗石の堅さや凹凸が聞こえるし、またやわらかい音とか、つやのない音とか、かわいた音といった言い方をわれわれはする。最後に、眼を閉じて、はがねの棒と菩提樹の枝をたわめる時、私は両手のなかで金属と樹木の最も内奥の組織を知覚する。(PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION, pp. 265-266, 邦訳, 下, pp. 40-41. なお、小町谷朝生、『視覚の文化』, 勁草書房, 1990, pp. 46-49, 参照。)そもそも、正常者においては、視覚的経験と聴覚的経験、さらにはその他の経験がそれぞれ存在しているのではなくて、一つの総体的な経験が存在しているのであり、そこではさまざまな感覚的寄与分の割りふりをつけることなど不可能なふうにできているのである。もっと複合的な行動や生活過程における習慣的諸傾向の相互浸透ないし(心身による指向的な)統合を例示してくれる、適切な事例——。盲人の杖は、彼にとって一対象であることをやめ、もはやそれ自体としては知覚されず、杖の先端が感性帯へと変貌しているが、その事情は、狭い幅の門を車で出入りする運転手や、帽子の羽飾りを気遣う、おしゃれな女性のなにげない、優雅な振舞いにおいても同じである。いわば既に一種の「昵懇知」savoir de familiaritéとして心身の働きに同化・統合されてしまった諸々の習慣的行動傾向が、当面意識的に制御されつつ為される或る操作の暗黙の構成要素として——注目の焦点を為す、図ないし「暗黙知の第二項」, 「遠隔項」を浮かび上がらせるところの、地(背景)の文脈または「暗黙知の第一項」, 「近接項」として——働いているわけである。(PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION, pp. 167-168, 邦訳, 上, pp. 240-241. M. ポラニー, 佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ——』, 紀伊国屋書店, 1980, pp. 22-25. 同, 長尾史郎訳『個人的知識——脱批判哲学をめざして——』, ハーベスト社, 1985, pp. 51-54.) 人の顔——相貌——の視覚的弁別は、通常その表情(の変化)の知覚と、さらには身振りや話し方(声)等の知覚と密接に結びついているし、ことばによるコミュニケーションは「相互同調活動」(interactional synchrony)と呼ばれる、対話者相互のからだの同期的動きによって補完され支えられている。この相互シンクロニーの働きは、既に乳児と母親との間にも現れるが、誕生前のさまざまな障害のためにこの同調的活動が欠如したり、極く弱かったりすると、その赤ん坊は「抱きにくい」, 「応答のない」子であると(母親には)感じられることになる。(浜田寿美男・山口俊郎、『子どもの生活世界のはじまり』, ミネルヴァ書房, 1984, pp. 187-191. 佐々木正人、『認知科学選書15 からだ: 認識の原点』, 東京大学出版

会, 1987, pp. 8-11, 151-155. T. G. R. バウアー, 岡本・野村・岩田・伊藤訳『乳児期——可能性を生きる』, ミネルヴァ書房, 1980 (1977), pp. 37-40.) 最後に, タイプライティングや自動車の運転から, さらに進んで, ダンスやオルガン演奏やエッチングというような種類の行動に至れば, それらを遂行している心身の過程が暗黙の仕方で統合し具現している, 習慣的なメカニズムの相互的な作用と浸透の体系の複雑さは, 殆ど目もくらむほどのものとなる。まさに「習慣の獲得とは身体図式の組み替えであり更新であって」(PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION, p. 166, 邦訳, 上, p. 239.), 「身体図式」とは, この場合, 集積・統合された習慣的なメカニズムの相互作用ないし相互浸透の全体としての体系を意味しており, この種の体系こそが当の行動主体の行動傾向又は性向を規定するものである。人が或る「表情や身振り」のうちによりっきりその正体を露見させてしまったり, 個々の行動を通じてその人の性格が或る程度まで読みとられたりするの, 行動をまさにそのあるがままに引き起こし, それを成り立たせて働く, 心身のこの種の習慣的な行動傾向の相互浸透の全体的体系とその連続的な——暗黙の, または前意識的な——働きの故である。(HUMAN NATURE AND CONDUCT, p. 30, 邦訳, p. 33. H. ワロン, 久保田正人訳『児童における性格の起源』, 明治図書, 1965 (1949), p. 24.)

さて, 習慣を獲得し, それを「身体図式」の再組織として統合することによって, 行動の意味を一層豊かにしていくものは, 他ならぬ「身体」——「現象的身体」あるいは「実存」, この私自身としての身体=精神, 心身——の働きである。習慣を統合する, このような「身体」, 心身の働きは, 反省的意識の知的総合の働きに先がけて既に進行している。私とは, 「私の身体」に他ならないが, そのような私の「身体」, 心身は, 「世界の媒体」le médiateur d'un mondeとして (PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION, p. 169, 邦訳, 上, p. 243.), 既に或る状況に属してそれを所有し, そこで活動している。そして, その活動において, 「身体」, 心身はその無数の諸部分, 側面の働きや運動を一個の(均衡を保った)全体として統合しつつ機能し, 新たな均衡を再組織しようとする。そして, まさにこの種の「身体」, 心身の「一般的総合」, あるいは「身体」, 心身の「統一性」こそ, いずれ「身体図式」——習慣的なメカニズムの相互浸透の全体系——として展開していくものであるが, それこそはまた, われわれが「身体」, 心身を「始元的な習慣」l'habitude primordiale, 「他の一切の習慣を条件づけ, それらを理解できるものとする習慣」(ibid., p. 107, 邦訳, p. 162.)と看做すところの, 根拠である。

3-3.) 活動の意図の未分化で包括的な性格

——事物やできごととの直接的で多面的な相互作用としての活動が帯びる固有の特徴——前反省的, 意識的な活動や精神的諸過程に共通して見出される, 一般的な傾向ないし特性として, 第二に, 活動の意図の——多様な好みや関心や動機を未分化なままに包括し, 混在させた——未分析的で統合的なあり方が指摘される。

前意識的な活動(および, 精神生活)の諸過程は——体系的に調整された反省的な意識の働きの統御の下に, 分析的に特殊化されて構成された, 或る一面的な意図に導かれて, 予め選択・限定された一定の単一種類の対象に対して, 純粹に単一の意味を担って行われる——というような性格の活動の過程ではなくて——通常, 多面的で多様な好みや関心や動機等を, その主観的な意図それ自体のうちに同時に混在させて, 進行する。そして, この場合の, 多様な好みや関心や動機等の未分化なままの包含, 統合ということについて, さらに具体的に, われわれ

は次のような傾向を指摘することができる。即ち、(1)或る活動の諸過程にひとつながりの活動としてのまとまりや方向性を与えているところの、(当該活動の)主題的な意図が、それ自体、いくつかの他の意図や動機を包含して、それらを並存ないし混在させていること——例えば、相異なる生活領域や行動場面でそれぞれ通常作用させている、関心や好みの浸透と並存、さらには、同一の生活領域・場面における、異質なまたは相対立する意図や動機の中途半端な折衷と妥協等、(2)並存し混在している、それぞれの好みや関心、さらにはそれらを包括・統合している、(一連の活動の)主題的な意図や動機が、それ自体として未分化、未分析的で、その意味内容が多義的・多面的であること——例えば、行動の状況を構成している諸条件の事実認識や諸結果の予測の未分化な粗さ、それらの事実の認識・予測と好みや価値関心の働き(行使)との混同、事実に関するその種の認識・予測を、一個の行動の意図あるいは動機へと構成する(価値判断の)過程への、他の行動文脈の諸々の好みや価値関心の混入、かくしてその意味内容において大体の、大ざっぱな「つもり」だけが問題となるところの、意図や動機等、(3)或るひとまとまりの行動における、(それ自体多義的な)或る意図や動機から別のものへの、主題的な意図の知らずしらすの容易な移行と、その変質、換言すれば、行動の主題的な意図・動機が多義的な連続性と不連続性——例えば、類似の関心や好みによる目下の主たる意図・動機の暗黙の補強や合理化、相対立する他の意図・動機への容易な乗り換え、極めて自然で偶然的な(あっけない)行動の終結と転換等、である。

ところで、日常普段の行動の過程では、われわれは現実の或る具体的な事物やできごととの直接的な働きかけ合いの渦中であって、それらを実際に、具体的に、したがって殆ど無限に多面的且つ多様な仕方でも——そして結局、取り返しのつかない仕方でも——改変する。直接的な行動の状況のこのような展開のうちで、変化するのはその種の環境の諸条件だけでは勿論ない。環境諸条件の直接的で具体的な働きかけを受けて、われわれ、行動主体の主観的な諸条件——例えば、意図や動機、事態の見通しや好み、身体的・生理学的諸条件等——もまた、現実且つ具体的に变化する。この種の、直接的な現実の活動は、それ故に、内面的・想像的に観念を操作して行うところの、反省的な思考活動とは、根本的に異なった次元の働きであり、本質的に異なった性格を帯びている。この二種類の活動を区別して特徴づけるものは多々あるが、われわれの目下の問題意識の文脈から見た場合に、最も決定的な意味を帯びた両者の相違点は、それら両種の活動においてそれぞれ人が関わり合い、取り扱っているところのものの種類の違い、である。反省的思考活動において取り扱われる諸「対象」——「事実やデータ」および「仮説的観念」——が、専ら専門的に特殊化されて分析的に限定された、それぞれの一義的な問題関心に基づいて、厳密に一面的な意味だけを担うものとして構成された産物であるということについては、われわれは既に指摘しておいた。(「反省的意識の働きに先行するもの(その1)」, 1.) 反省的意識の働きに先行するもの——日常生活過程における活動の前反省的、前意識的性格——、本『紀要』12巻2号, p. 81.) これに対して、日常生活過程においてわれわれが関わり合い、取り扱って、その諸性質を味わっているところのものは、まさにこのような反省的分析的構成(抽象化)の操作によってそのただ一面のみが目目され強調されて、「対象」化されるようになる以前に存在している、事物やできごとである。日常普段の生活の場面においては——制度の拘束的な働きでも存在していない限り——、事物やできごとと関わり合い、それを取り扱う際に、専ら或る種の一面的な接近の仕方しか許されず、それ以外の仕方でもその諸性質を享受することのできないような事物やできごとは、稀である。事物やできごとは、通常、

人々の関心や好みにしたがって、それぞれ多様で多元的な文脈において接近され取り扱われ、その諸性質を所有・享受されているのであって、そのような無限に多様な関わり方を許容するところの、存在の仕方における豊かさが、それらにはある。具体的に存在する現実の事物やできごとは——観念的操作の「対象」と異なって——、それが帯びている多様な諸性質で以て、われわれの関心や好みを幾通りもの仕方で同時に惹きつけ、刺激し、それが担っている多次元で多面的な文脈で以て、われわれの幾通りもの仕方での接近と取扱いを挑発する。例えば、「教育的」なできごとや問題は、始めからまさにそれ以外のものではあり得ないようなものとして、その貼り札をぶらさげて存在しているわけではなくて、社会生活の或る過程、或る側面が「教育的」問題関心を抱く人々によって注目されて、まさにそれと識別された後に、初めてその種の問題として登場することになるのであるし（村井実、『教育学入門』、上、講談社学術文庫、1978、p. 94-96.）、また、子どもは常に「児童・生徒」であるわけではない。食事の或る食べ方や清掃活動における或る態度は場合によって「道徳教育」的に指導されたり、服装や言葉遣いの節々に場合によって「非行生徒」としての性行・態度が洞察されたりする。「校則」は十数ページを費やすほど繁雑で詳細を窮めたものともなり得るが、またほんの数項目で十分成り立つ場合もある。また、一般に、日常生活の状況においては、或る特定の関心や意識態度を専ら一面的に——過度に厳密に、つまり「杓子定規に」——貫徹しようとすることは、むしろ、非常識的で非人間的な態度を疑われることになるのであって、諸種の関心や相対立する諸原理のいわゆる「兼ね合わせ」とか「中庸」を得た態度こそが肝心のものとなる（「規則至上主義」、「イデオロギー過剰」、「利己主義」、「堅物」、「仕事中毒」、「守銭奴（けち）」等々）。われわれはかくして、通常の直接的行動の諸過程において、それぞれの事物に同時に幾通りもの多様な仕方で接触し、取扱い、その多様な諸性質を同時に幾通りもの仕方で享受する。

日常普段の生活の事物やできごとの存在の仕方における豊かさは、それぞれの事物やできごとに関して、それぞれのおおよその文脈——その出現の諸条件とそれに伴う諸結果——の差異に応じてわれわれが感受するところの諸性質、情緒的・美的・道徳的（いわゆる「第三次的性質」tertiary quality）および感覚的性質（いわゆる「第二次的性質」secondary quality）として、即ち、それぞれの事物やできごとにおける諸性質の未分化な、充実した重なり合い、相互浸透として、与えられている。そこでは、活動の状況は——意識的な反省の働きによって、活動主体の側の主観的諸条件と環境諸条件とにそれぞれ分析的に十分に識別されて据えられるには至っておらず——未分化で統合的な一全体を成すものとして、それが帯びている主たる諸性質によって直接に感受されているが、この活動状況全体が帯びている性質が第三次的性質としての特殊な感じ、感情または情調 senses, sensa, feelings, sensory affections であって、それには例えば、身に激しくこたえる、悲劇的な、美しい、滑稽味のある、安定した、不穏な、心地よい、いらいらさせる、つまらない、不快な、慰めを与えるような（やさしい）、素晴らしい、恐ろしい等々と表現されるようなものがある。さらにまた、その活動の状況を構成している主要な構成要素として、特定の事物やできごと、あるいは或る主観的条件がある程度分節されて感受されているような場合には、それらの事物やできごとはそれぞれ特殊な感覚的（第二次的）諸性質に彩られたものとして、受け取られる——例えば、さまざまな色、音（色）、手ざわり、匂い、味、特殊な器官的または臓器的感覚等として。（EXPERIENCE AND NATURE, pp. 198-200, 82.）そして、活動の状況がその全体において感受される場合の、それを取り囲んで広がっている生活の過程や文脈は、通常のわれわれの行動においては、未だ——反省的・分

析的な思考の操作によって——（その種類と広がりにおいて）ただ一つのものに一面的に限定されているわけではないし、また、その活動状況の内部でその構成諸要素としての事物やできごとの性質が感受される場合の文脈も——分析的に設定された特定の観点から——ただ一つのものだけに厳密に限定されているわけではない。それらの場合の文脈も、活動の状況や事物・できごとが帯びる諸性質も、もともと未分化なものであって、幾つかのものが並存することができるし、また必ずしも相互に厳密に排除し合うものではなくて、相互に浸透し合っているもの、浸透し合うことのできるものである。それ故に、われわれの活動の状況やそこでわれわれが取り扱う事物とできごとは、同時に幾つかの諸性質、情調や感覚によって重ねて彩られ、それらを同時に未分化なままに統合し混在させているというのが、その通常のあり方である。そして、具体的に存在している現実の事物やできごとと直接に関わり合い、それを直接に取り扱う、われわれの日常普段の活動は、かくして、多元的で多様な諸性質——情調や感覚——を未分化なままに担って、それらに多面的に且つゆるやかに彩られて展開されることになる。

勿論、われわれは、普段の生活の過程で、自然に（特別の意図なく）行動してその雰囲気無心に浸り、事物やできごとにただ偶然的にでくわして、その場その場でそれらの諸性質をそれぞれあるがままに感受し享受しているだけ——では決してない。自分の好みや関心に適合した行動の状況は——それを構成している、外的および内的諸条件の変化に応じて——容易に中断され消失したりする。また人は、今日下の環境の諸条件が直接的には許さないような、或る諸性質を享受し、かくして自らの或る好みや関心を充足するような行動を、敢えて企て、それに乗り出すこともある。というよりむしろ、この後者の種類の行動の方が日常生活の過程では一般的で通常のあり方である。そして、その場合には、われわれの好みや関心——即ち、或る種の状況における行動が帯びる特殊な情調、或る事物やできごととの具体的な関わりに伴う特定の諸性質・感覚を享受することとしての、好みや関心——は、即座の直接的な行動の諸条件が充足されていないために、その種の直接行動とはすぐに結びつかずに、呼吸や循環の変化、消化器や内臓の痙攣としての「緊張活動」tonusと筋肉の収縮や弛緩としての「姿勢活動」fonction posturaleとを伴った、それぞれ特殊な「情動」emotionとなって具体化する。この情動反応は、それが適度に働く場合には、知覚活動を特定のものに集中させ、行動上の諸条件の或る相互関係への洞察を刺激し、筋肉組織を敏捷さと強い収縮とのために備えるように働いて、日常的な直接的行動、交渉的行動への推移を促進する。この場合には、これまでその直接的な実現を阻まれていた、われわれの例の好みや関心を成就すべく、特定の諸性質や感覚の享受が敢えて望まれ、意図されて、追求されることになる。（情動反応は、また、一方で、外部感覚や弁別感覚を殆ど麻痺させた、自己増殖的な全身痙攣へと発展する場合もあるし、他方では、知覚活動やそれに基づいた、行動上の諸条件の分析的な探索へと推移し、反省的思考活動へと結びつく場合もある。H. ワロン、久保田正人訳『児童における性格の起源——人格意識が成立するまで——』、明治図書、1965（1949）、pp. 43-47, 77-84.）かくして、「その行為において意図された結果」が、その行為の「動機（または目的）」であるが（我妻洋、『社会心理学入門』、講談社学術文庫、下、1978、pp. 271-272.）、われわれの日常行動は、通常この種の主題的な動機、目的、もっと一般的には意図を帯びて成り立っている。通常のわれわれの行動がまとまりと方向性とを帯びて展開されるのは、それがこの種の或る主題的な意図に動機づけられており、（それを享受することを意図し望んだ）一定の諸性質——情調や感覚——によって、いわば予期的に浸透され彩られているからである。

そして、普段の生活の現実の過程においては、われわれの直接的で具体的な行動を動機づけるところの主題的な意図は、それ自体、或る、明確に分析的に識別された、単一の性質——情調や感覚——の純粹に一面的な享受を意図するものでは決してなく、当該行動の終局的な状況が帯びることになる、多様な諸性質(情調や感覚)の未分化な——相互に浸透し合った——まとまりであるし、それはまた、その一連の行動が終局的局面に立ち至るまでに経過するところの、諸々の状況および事物・できごととの交渉を彩る多面的で多様な諸性質をも包括し、それらの影響を色濃く受けているものでもある。反省的な仕方ですれずしも明確に意識されて動機づけられてはいない、(通常の行動の)大ざっぱな主題的意図の下では、ひと続きの行動における中途場面での事物やできごととの出会いと交渉の享受は、それ自体それぞれ一つの動機や意図としての含みを帯びてきえている。子どものみならず、われわれの行動は、通常しばしば「脱線」し「道草」を食う。われわれの日常行動を根本的に特徴づけている、このような意図の未分化なあり方やその動機づけの不安定な流動性は、存在の世界に直接関わるものとしての現実の行動に自ずから伴うものであって、むしろ通常の生活行動が孕んでいる意味——諸性質とそれらが担っている文脈——の豊かさを、示唆するものである。そして、さらに、この種の直接的な生活行動が尽くせぬ意味に充ちているのは、他でもなくそれ自体が存在世界の一個の現実、一つのできごとであるからである。

3-4.) 活動諸過程の一般的・匿名的な性格

或る行動が一般的で匿名的であるということは、その行動が、専ら集合的ないし共同生活的な意味だけを担うものとして為されたものであるということである。私の或る行動が、自ら所属している共同生活の過程において、基本的に必須で且つまたまったく自明の行動の仕方・様式として、他の成員たちと自ずから同調しつつ、自然に為されている場合、その行動は一般的・匿名的な性格をもつ。それは、皆で為したもの、というより皆(われわれ)——即ち、共同体——が為したものであって、もはや私が為したものではない。私もそこに参加して、それを為してはいるが、その場合の私は専らその共同生活を体現する者、その一成員としての私であって、敢えて第一人称を用いて「私が」と表現せねばならないような、行動主体ではない。私は、そこでは、もはや己れの一存によっては自由に処理することのできない一つの集合的な雰囲気、皆と一緒に、つまり共同体の単なる一員として生きたわけである。勿論、この種の、日常普段の生活過程を構成している、まったく自明で自然な行動には、通常明白な主題的な意識は伴っていない。それは、心身によって自ずから為される諸過程であって、「私が為す」という主題的意識を伴った能動的な自己遂行としての行動とは、明白な対照を成している。かくして、例えば、静かな教室の授業で、それぞれ自らの作業に主題的に集中しながら、生徒たちが、私語し合ったり不必要な音をたてたりすることを自ずから憚り合う時、彼等は授業のこの雰囲気、自ら相互的に生み出し維持しつつ、匿名のままのものとして感受して生きる。「合唱」においては、私の聴覚(身体)は、自らの発した歌声を聞くのではなくて、まさに(全員の)合唱の歌声を感受して、自らの音声をそれに調和させていく。私は、そこでは、独唱している時には生きることのできなかつた歌う生を営んでいるのであって、己れの生の狭隘さから解放された気分の昂まりを覚えるに至る。(中田基昭、『授業の現象学——子どもたちから豊かに学ぶ』、東京大学出版会、1993、pp.144-150., 164-173.)

われわれの日常生活の過程の大部分を構成している、前反省的・前意識的な活動は、極めて

顕著な仕方であるにせよ、暗黙の仕方にせよ、共通の特性として、この種の匿名的・一般的な行動としての特徴を帯びている。この場合には当然皆がそうする——というより、共同体がそうする——ように、私の心身が自然にそうしてしまっているというような行動が、われわれの通常の行動の基本的な特徴なのである。われわれは自分一人で行動し、考え、生活しているわけでは決してない。われわれの行動環境は、何よりもまず社会環境である。われわれは、各種の社会環境からすっかり脱け出して行動したことは一度もないし、そうすることは決してできない。われわれの生誕それ自体が既に、先行する一定の共同生活の果実であるが、或る生活共同体にその成員として誕生して以来、一個の自立した個人としての自分のあり方を意識するに至るまで、その意識の有無にかかわらず、人は各種の集団や組織に迎え入れられて、生活を共同して営みつつ、その文化——生活や行動の仕方・様式——の刻印を受け取っていく。われわれの行動は——それがまったくの反射的反応でもない限り——、改めて「社会的であるべきである」と訓戒されるまでもなく、そのあるがままに既に「社会的である」。われわれは常に、自らの振舞に対する人々の対応を考慮に入れて、彼らと共に行動し、彼らと共に考え、感じ、感情生活を営んでいる。そして「自我意識」consciousness of selfの形成それ自体も、ただこの種の社会生活の深まりの過程でのみ可能となる。(G. H. Mead, MIND, SELF, AND SOCIETY, The Univ. of Chicago Press, 1934, pp. 135-226., 稲葉・滝沢・中野訳『精神・自我・社会』, 青木書店, 1973, p. 145-239.)

ところで、集団的に、集団や組織の一成員として行動するということについてさらに具体的に考察すれば、それは、ただ単に或る他の成員の個々の行動・態度や言葉に直接に依拠して、私が振舞うということでは決してない。そこでは、個々の成員がそれぞればらばらに行動していると看做されているのではなくて、全員が、その態度において「ある種の統合体」へと組織化されていて、この組織化された態度の立場から自分の行動をそれぞれ位置づけ調整して為していると感受されており、かくして（この種の理解に基づいて）私も、何よりもまずこの組織化された態度に準拠する人々、集団の一員として、自分の行動を同様の仕方ですべて調整しつつ、展開することになる。そして、ここで、各成員が、その形成にそれぞれ寄与しつつ、自らの（成員としての）行動を首尾一貫して調整する場合に、その基本的な前提、一般的な観点や原理として準拠しているところの、組織化された、集会的なかの態度が、いわゆる「一般化された他者」generalized otherである。一般化された他者の態度を採用する時、私はその集団と自分とを「同一視」することになり、当該集団の内外に生じてくるさまざまな種類のできごと、集団内外の人々の行動や態度を、その集団の組織化された社会的態度に基づいて注目し、評価し、かくしてまた自らのそれらに関わる態度・行動を統制する。私は、通常的生活において、同時に幾つかの共同体や組織に所属して、そのそれぞれにおいて組織化された社会的態度を自ずから引き受け、場合によってそれらを相互に調整しつつ包括・統合するような、より一層一般的な集団生活のあり方を求め、そこでの組織化された社会的態度を習得していく。私は、抽象的に思考する場合、最も包括的で広範な広がりをもつ、論理的に組織されたコミュニケーションの世界における、一般化された他者の態度を（自分に対して）採用している。(MIND, SELF, AND SOCIETY, pp. 152-164., 邦訳, pp. 164-175.)

さて、そこで(本項のテーマとして)、われわれが自ら採用した、まさにこの種の、組織化された社会的態度が、われわれの日常生活の行動諸過程にどれほど広範に浸透して、それを支えたとともに枠づけ・規定しているか——具体的な事例に依拠して、示さなければならない。

G. H. Mead は、前述のように、諸個人による「役割取得」role-taking と「一般化された他者」の引き受けを通じての「自我意識」の形成を示唆したが、我妻氏（『社会心理学入門』）は、この理論が西欧人よりも日本人にはるかにうまく適合すると指摘している。西欧人には「自己は役割から離れて存在するという考え」があるのに対して、「日本人の自己概念は、当人の役割概念を離れては存在しにくい。」（pp. 256-259.）われわれの「自己実現」とは他ならぬ「役割行動」の完遂を意味するものであって、或る集団や社会秩序の模範的な成員、つまり「一般化された他者」の態度の最も典型的な体现者となることである。われわれの自己概念が社会的身分と密接につながっていることは、対話における相手や自分の表現の仕方に最も典型的に現れている。家庭の会話においては、「お父さんは――」、「お母さんが――」、「兄ちゃんが――」、「ばあちゃんは――」と自らも表現し、相手もそのように応ずる。学校では、児童・生徒に対して、教師は自分のことを「先生は――」と言い、また教師相互に「先生」と呼び合う。勤め先の企業や官庁においても、隣近所や街頭やお店の中の間人間関係においても、事情は殆ど同じであって、「私は――」とか「あなたは――」とかいう仕方で一人称や二人称の代名詞が使用されることは少なく、むしろそれは避けられている。そして、それらの社会的な身分や役割の対応の仕方に応じて、敬語をはじめとする或る種の言葉遣いが自ずから定まってくる。（鈴木孝夫、『ことばと社会』、中公叢書、1975、pp. 38-43.）これらのことは、われわれの日常普通の行動や態度が、自らの属しているそれぞれの集団生活の一般的な態度や他者の一般的なまなざしによって広範に且つ根深く浸透されて規定されている、ということを端的に示唆している。われわれの行動における、集団秩序へのこの種の過度の埋没や過剰適応の傾向は、それがあまりにも普遍的・遍在的で、われわれをすっぽりと覆い包んでしまっているために、逆にそのメカニズムや効果に気づくことが困難となっている。例えば、私が就職する場合、それは――専ら特定の契約に基づいて、特定の条件の下に特定の（専門的に分化した）職務を請け負うのでは決してなくて――「入社」する、つまり会社にその「一員」、「身内」として「所属」することを意味する。社内の業務単位は通常「課」であって、私は定期一斉人事移動によって配属された課で、同僚たちと連帯してひとまとまりの業務を行う（残業の常態化）。人事考課――昇進――の意味を含んだ定期人事移動において評価の対象となる私の「能力」は、特定の業績として測定された個人的な専門的職務能力ではなくて、当該課における旺盛な「身内」意識やそれと結びついた何でもひと通りこなす力、要するに「モーレツ」な「意欲」「ヤル気」である。それ故、わが国の経営体では新規学卒者定期一括採用制が自ずから一般化することになるが、その際求職者に求められるのはまさにこの種の未分化で総合的な「将来性（成長可能性）」――「モノ」になりそうな人物――であって、それを識別する妥当な尺度として「学校歴」、即ち大学入学試験における偏差値が専ら使用されることになる。そしてその結果、この学校歴に結びつく、下級の諸学校における「学力」が、生徒・児童の「将来性」、ひいては彼らの人物、つまり人格的価値を表示するものとして拡大解釈されて、広く通用することになる。結局、「学力」――つまり、わが社会で通用している「一般的能力」概念――とそれをめぐって展開されている「受験戦争」とは、わが国独特の集団経営原理としての「経営家族主義」に埋没し尽くした挙句、集団秩序の一般化されたまなざしに対して過剰に且つ過敏に適応してしまった、われわれ自身の社会生活の根本態度がもたらした、直接的且つ具体的な結果なのである。（岩田龍子、『日本の経営組織』、講談社、1985、pp. 100-108, 148-151.）

通常の生活を暗黙の仕方で深く彩る、それぞれ特殊な「責任」の意識もまた、各種の集団生

活で自らが内面化した、一般化された他者の態度と結びついて、まさにこの一般化された他者に対して負うものとして、初めて成り立つ性格のものであるが、社会的役割の意識が個人的生活の内面をも広く支配するに至った、われわれの社会では、この種の意識が肥大化しがちとなる。日本人の勤勉さもまた、それによって支えられている。(J. Dewey, ETHICS, 1934, The later Works of J. Dewey, Vol, 7, pp. 217-219., 久野収訳『倫理学』, 河出書房, 1966, pp. 207~209 我妻, 『社会心理学入門』, 下, pp. 247-257, 259-261.)

「社会及び家庭における男女の伝統的役割の変更」の問題は、わが国のみならず世界的な規模の問題であるが、伝統的な性別役割分業——つまり、「性差別」sexism——を暗黙の仕方（男女共に）受容しつつ、多くの熱烈な相愛と幸せな家庭生活がこれまで成り立ってきた。今でもなお「男女特性論」として通用している、この性別分業はわれわれの匿名的な行動態度の典型を成すものであるが、それはその結果として女性の側に「得体の知れない悩み」the problem that has no nameを生み出すこととなった。(国連, 「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」, 1979. 金城清子, 『法女性学のすすめ——女性からの法律への問いかけ』, 有斐閣, 1983. pp. 45-64. Betty Friedan, THE FEMININE MYSTIQUE, W. W. Norton & Co., 1963, pp. 15-32., 三浦富美子訳『新しい女性の創造』, 大和書房, 1965, pp. 11-29. 亀田温子・館かおる, 「学校におけるセクシズムと女性教育」, 女性学研究会編『講座 女性学4 女のみで見る』, 勁草書房, 1987所収, pp. 79-101.)

匿名的な性格を色濃く帯びた、もっと一般的で基礎的な行動過程として、コミュニケーションの諸過程や、さらにその前提条件を成すと思われる、他者の「気持ち」や「表情」「身振り」の理解のメカニズムを指摘することができる。通常の意味でコミュニケーションを行う（象徴としての身振りや言葉を使う）ためには、私は、自分の行為が相手から引き出す（相手にとらせる）反応を予期できなければならない。そして、事実、それは極く自然に、暗黙の仕方で行われている。(いわゆる「三重の関係」triadic relation, MIND, SELF, AND SOCIETY, p. 145, 171. 邦訳, p. 156, 183.)そこで、私がその場合に行っている、反応の予期の具体的な仕方、メカニズムが問われるが、それは次のように説明される。私が彼に或る種の働きかけを行う（気になる）のは、彼と私が共に一個同一の或る共同生活に所属している、同じ成員であるからであって、私はそれ故に彼に対して、一定の反応の仕方、即ち当該生活共同体の一般化された他者の態度に基づいて為されるような反応の仕方を期待してよい、否、それを要求することができるからである。彼は、私が当該集団の、その一般化された社会的態度に則って或る働きかけをする限り、同じくその種の一般化された他者の態度を具体的に体現したものであるかとしての或る反応を当然行うものと予期される——というわけである。われわれは、他者に働きかけ、語りかける時にはいつでも、暗黙の仕方でのこの種のメカニズムを行使している。それ故、相手を、自分が所属しているのと同じ、どのような種類の集団生活の成員として看做すかに応じて、われわれの働きかけの仕方と意図は異なってくる。相手が同郷の人、同業者、同好の人ともなれば、話しかけの意図のみならず、言葉遣いも独特の親密なものとなる。人影稀な奥山の縦走路では誰でもが挨拶や情報交換の相手となるし、若者同士の間では交友への積極的な働きかけ合いもある。幼児は、かくして母親や家族に——自分の言葉や身振りに対する多面的で濃密な理解を当にしながら——言わず語らずの諸種の行動を要求するが、その種の、手がかりとなる共通の背後文脈を設定することができないと思われる相手に対しては、手を出さない。彼らにとっては、入学したばかりの学校の人間関係は、直接的に依拠すべき、この種の周知の手がかりや

支えを殆ど見出すことのできない、途方もなく面くらわせられる種類のものなのであろう。「みなさん」や「ぼくたち」の間の単なる一人として、私的な生活諸関係から引き離されて、彼は今度は、新たな集団生活の形成に自前で参加し、この集団の一般化された社会的態度に新たに依拠して、他の「みんな」や「ぼくたち」との相互作用を自前で営まねばならない。彼はいずれ、この新たな集団の一般化された他者の態度を習得して、その集団生活をそれなりに過ごすようになるが、その時彼は、家庭生活におけるのとは質的にまったく異なった、新たな匿名性の世界に生きることになる。彼は、家庭における場合とはまったく異なった仕方、新たな集団生活に再び埋没する。実際、学校（の教室）では、集団の中から自分の子を探し当てるのが非常に難しい。（岡本夏木、『小学生になる前後』、岩波書店、1983、pp. 117-122.、『ことばと発達』、pp. 50-52. 斎藤次郎、『子育て原論』、教育出版、1976、pp. 186-189. 八杉晴美、『塾は学校を超えられるか』、三一書房、1983、pp. 110-112.）

さて、コミュニケーションを行う（象徴としての身振りや言葉を使う）ためには、自分の行為が相手から引き出す反応を予期できなければならないと考える場合、われわれは、その前提として、自分が相手の「反応」（に込められた「気持ち」feeling or emotion、一般に意味内容 meaning）を理解することができる——ということに既に仮定している。だが、少し反省して見ればわかる通り、そのことは容易に前提し得ることで決してない。他者の反応、つまり表情や身振り・態度、言葉における気持ちを、われわれは一体如何なる仕方、理解しているのかということは、改めて問われてよい（問われなければならない）ことである。そして、この問題は、最近心理学において、「向社会的行動」prosocial behavior の前提条件としての「共感(性)」empathy の（発達の）問題として考察されているが、満足のいく説明が為されているとは思われない。人が他者の情動的反応を知覚して、「その他者と共有する情動的反応」が共感と呼ばれるわけであるが、この種の共感の構成要素として、例えば次のような三つのものが指摘されている——他者の情動的状態を弁別してそれに「命名する能力」、役割取得能力、即ち他者が実際に経験しているのと同じ仕方、私が彼の考えや役割を予想する能力、および情動的反応性、即ち、私が見ている他者の情動をまさに共有するような仕方、経験することである。（P. マッセン、N. アイゼンバーグ著、菊池章夫訳『思いやりの発達心理』、金子書房、1980、pp. 148-149. N. Eisenberg & P. H. Mussen, THE ROOTS OF PROSOCIAL BEHAVIOR IN CHILDREN, Cambridge U. P., 1989, 130-133. この後者においては、他者との間の「同一の情動を感じる」と、即ち、情動の文字通りの「共有」は否定されている。）しかし、第一と第二の構成要素は、共感の構成要素というより、共感の働きによって生み出された結果としての作用に過ぎない。他者の或る情動状態に命名したり、彼のその際の考えや役割を予想したりする以前に、私は既に彼に、彼のただならぬ状態を直接感受し、それに直接注目しているが、ここでわれわれがまさに知らねばならないのは、まさにこの直接的な感受・注目のメカニズムそれ自体であって、それ以後に働かす知的な装置の働きでは決してない。そして、第三の構成要素は、構成のメカニズムの説明ではなくて、単なる同義の反復に過ぎない。

人間をそれぞれ「個体」として、他の個体、個人から引き離して、まったく独立して行動する者と看做し、個体としてのこの種の行動主体がその環境との相互作用を行って、その諸能力を発達させていくという、伝統的な、いわゆる「主-客」構図に基づいて、要素的な諸能力・特性を論ずる、「個人心理学」は、幾多の解決不可能な人為的な「パラドックス」を抱え込むことになるが、感情や情動の営みの理解が問題となる場合には、その種の問題設定の仕方の困難

は特に顕著なものとなる。何故ならば、情動は、通常直接的な交渉活動やそれと結びついた知覚や表象の働きとは「拮抗関係」にあり、環境諸条件への対処を直接促進するように働くものではなくて、その主たる働きは他者の感情生活への働きかけ、他者との諸関係の調整にあり、「集団的努力や社会生活の成立を助けることにある」からである。(H. ワロン、『児童における性格の起源』, P. 70, 77, 80, 88-89.) 乳児の泣き声や身体の緊張は、その環境条件を直接、具体的に作り変えるものではなくて、母親の感情に或る仕方でも働きかける。人の怒り——その特有の表情や筋肉の震え等の身体的変化——は、当面の状況における彼の直接的な対処行動を必ずしも容易にし促進するものではないが、侵害者への「警告」として作用する。(戸田正直、『感情——人を動かしている適応プログラム』, 東京大学出版会, 1992, pp. 12-13.) 人はみな、それぞれの身体を生きる個体でもあるが、それ以前に既にその身体の働きそのものにおいて他者と通じ合い、相互主体的に働きかけ合っているところの「共同存在」(浜田寿美男、『発達心理学 再考のための序説』, ミネルヴァ書房, 1993, p. 150) であり、共同してその環境諸条件に対処している存在である。個体の環境への直接的な交渉活動において必ずしも有効に働きはしない、われわれの情動活動の働きは、その環境を共有して生活している周囲の人々との共同的諸関係の調整を考察の視野に入れる時に初めて、人間という種において特に豊かに分化・発達し洗練されるに至った、その働きがよりよく理解される。

情動や感情の共同の行使ないし共有が、通常的生活における原初的事実である。わたしの感情や情動と私の身体におけるその表現とは、通常——特に偽装を意図するものでもない限り——自然に一体を成していて、分化してはいない。そして、その種の活動が或る特定の意図、つまり「気持ち」を表現しているものであるということ、私は、周囲の他者によって——その意図、気持ちにまさに対応する或る取扱を通じて——直接に知らされる。嬰兒の頬のひきつきりに、親は、喜びの気持ちの表現として、われ知らず応対する。私の情動活動や感情生活が一定の意図ないし気持ちを帯びて表現しているものであることを私が教えられるのは、他ならぬ他者からであって、それ以前に既に、私がまったく私的で内密の動機を形成していたわけでは決してない。私の情動や感情は、その最初の場面から、既に周囲の他者と共に、共同の意図や気持ちを含んだものとして行使されてきたわけである。私の情動や感情の表現に対する他者の反応——表情、身振り、言葉等——もまた、勿論、彼らのそれぞれの感情や情動を帯びたものであって、それに対して、私は周囲の人々と一緒に、(特定の意図や気持ちを帯びたものとして)その都度反応するし、そのように共同的に反応することを要求される。私は、かくして、他者の情動活動や感情生活をもまた共同して行使することを、共同生活の過程で学ぶ。だから、それらの表現を見誤らない限り、私はそこに直接彼の意図や気持ちを感じ取る。「すべてはあたかも、他者の意図が私の身体に住まっているかのように、あるいは逆に、私の意図が他者の身体に住まっているかのようにおこる。」(PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION, p. 215., 邦訳, 上, p. 304.) 勿論、私は、まったく異なった種類の文化を身につけた人々の身振りや表情、その感情や情動については、その気持ちや動機を必ずしも的確に理解することはできないのであって、この種の感情的・情動的な行動や生活は——単に自然的なものではなくて——いわば「制度」であり、文化として形成されたものでもある。(ibid., p. 220., 邦訳, p. 310.) 表情や身振りを自ずから伴った、情動や感情という共同の資源を、共同で相互的に行使し合うところこそ、共同生活の最も直接的で手近な手段であり、そのもともとの目的を成すものでもあるが、私はその種の集団生活に習熟することによって、一層豊かな情動活動や感情生活を発達・

分化させていくことができる。情動活動や感情生活の過程は、かくして、れわれの通常の行動の匿名的な枠組を構成している、最後の根底であると考えられる。

On Pre-reflective, Pre-conscious Action (2)

Toshio KINEFUCHI*

ABSTRACT

In this paper — (2) —, I studied three major general traits of pre-reflective, pre-conscious actions. They are, (1) the habitual traits of these actions, (2) the undifferentiated character of their intentions, and (3) the general, anonymous character of their intentions. To make such three general traits clear is, I think, of use to study the mechanism of unity which gives all of these ordinary actions continuity, direction, and stability, without systematic reflective functions.

* Division of Foundations